



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2019年6月1日 第2号

巻頭言 神・人間・自然

DPC 所員 ジェームス・サック

最近私は、神様と人間と自然の関係について考えています。神様の観点から三者間の関係は非常に重要であると思います。ゴールデンウィークに、長野県の大自然の中に数日を過ごす機会が与えられました。雪が山に残っているのに、活気に満ちた鳥のさえずりと新しい緑の葉や花の急速に広がっていく様は、非常に美しいものでした。

私は、神がこのように自然とすべての生き物とを創造されたことに畏敬の念を抱きました。一つの花の細部を観察し、鳥の動きを見ました。数羽が一緒にこちらからあちらへと飛んでいました。神の世界の中ですべての生き物がどれほど互いに結び合い完全に一体になっていることかと驚きました。素晴らしい調和と統一に感動し、神の創造に対して感謝の気持ちが心に満ちました。

創世記では、神はすべてを創造された後、最後に御自分にかたどって人間を創造し、創造を終えられたとあります。そして「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」（創世記 1 章 31 節）と記されています。これは神の創造における人間の重要性を示していると思います。



自然と比較すると、人間関係の中に美しさと調和を見出すのは困難なことが多いようです。自然の中で神を感じることは簡単にできるのに、なぜ私たちは他の人間を見ると批判したり傷つけたりすることが多いのでしょうか。なぜ人間に同じ畏敬の念と美しさを見つけることが難しいのでしょうか。なぜ他人を見下して批判する傾向があるのでしょうか。

創世記の中で、神は人間に言われました。「海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」だから人間は誰もが被造物の中で特別な存在だと示されていると思います。新約聖書でもイエス様が最も重要な掟として「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」そして「隣人を自分のように愛しなさい。」とされています。神は神のイメージで一人一人を造られたので、私たちは互いの中に、その掛け替えのなさを見るべきなのです。

DPC は神に責任を持ち、また私たちの隣人に対する責任を与えています。誰もが一人一人の持っている恵みと美しさ、神がすべての人々に込められた価値を見出すようにと願っています。

詩編と祈り ～音楽のスピリチュアリティとともに～

キャロル・サック

デール・パストラル・センターでは、この4月より新しい講座を開講いたしました。キャロル・サック宣教師によるこの講座では、キリスト教の長い伝統の中で育まれてきた人間の魂の理解を、詩編と音楽の中から学びあい、わかちあいながら、一人ひとりの魂の深い養いをともにしています。



2006年から2018年まで、私は、日本福音ルーテル社団のプログラムとして、リラ・プレカリアという研修講座を教えてきました。ベッドサイドでハープと歌声を用いて祈りをささげる—そんな人材を日本で育成する講座でした。私たちはこの活動を「パストラル・ハープ」と呼びます。このリラ・プレカリアの人材育成の研修講座は一年前に終了しましたが、ありがたいことに、この講座の学びの中から何かをDPCでの二年間を使ったシリーズとして提供してもらえないかという依頼をいただいたのです。

多くの方々は、パストラル・ハープの働きが第一に音楽による奉仕であると思われるかもしれませんが、しかし、パストラル・ハープで用いる音楽そのものは、私たちが患者さんに提供したいと願う「最終ゴール」ではありません。音楽はあくまで私たちが伝えたい「ほかの何か」を提供するための道具なのです。音楽を超えた「何か」、私たち人間の存在にとって根源的な「何か」に向かわせてくれるもの、それが音楽です。

この「何か」は何でしょうか？それは、「私たちが愛される存在であるということ」、あるいは「尊厳」、あるいはすべての人間に備わった「価値」と呼ぶことができるかもしれません。「深いところにある内なる平安」、あるいは「決して消えない希望」と呼ぶこともできるでしょう。

私が感じる場所は、この「何か」、この「大いなる愛」を受ければ受けるほど、誰かともっと豊かにその「何か」を分かち合うことができる。

そしてその方法は数えきれないほどさまざまにある、ということです。たとえどのような仕事、活動、状況、関係に私たちが置かれようと、私たちはそれを分かち合うことができます。それはハープという楽器だけに宿るものではなく、私たちすべてに宿る「何か」なのです。車が走るためにガソリンが必要なように、私たちもまず誰かにこれを与える前に、この「大いなる愛」によって慈しみ、養われる必要があると言えるでしょう。

旧約聖書の詩編。これは、もともとハープ（古い弦楽器）を用いて歌われてきた祈りの詩です。そして、何千年もの間、ユダヤ教の人々にもキリスト教の信仰者にも読まれ、また祈りとして礼拝や黙想に用いられてきたものです。ですから、これらの詩編はあのイエスにとっても自らの信仰と生を養う祈りであったと言えるでしょう。イエス自身がこの詩編を通して多くの人々の祈りを、ご自分のものとされてきたのです。詩編は、どの時代の人々にも語りかけるものですし、また私たち人間のそれぞれの在りようを神様に表すものなのです。

このDPCのシリーズの中では、小さなグループに分かれて一人ひとりがこれらの詩編を深く味わい、また語り合うことで、この「大いなる愛」についてより深く学び、そして何よりそれを受け取っていくことができることを願っています。私たちがこれを十分に受け取っていくときに、あますことなく豊かに与えていくことができるのだと信じています。

グリーフのいたみに寄り添う

～「あたりまえ」が変化するとき～

DPC 所員 小嶋 リベカ



「グリーフってなんですか」と聞かれることがあります。私は、これまでの「あたりまえ」がそうではなくなるなど、大きな変化や喪失を経験したときに生じる“いたみ”だとお伝えします。このような状況では人は、自分がここに在るという感覚や、先を見通すコントロール感を失い、バランスを保ちにくくなることがあります。それは、誰もが人生において経験することですが、そうしたときには寄り添う存在が必要となることがあるのです。

私は現在、医療機関でグリーフを身近なことで感じている若年がん患者とその子どもの支援に従事しています。未成年の子どもをもつ患者は、入院や身体機能の低下によって、これまで親として子どもに日常的に行っていたことができなくなる喪失を感じるものが少なくありません。その喪失感に伴って、親として子どもに申し訳ない、親らしいことをもってしてあげたい、といった気持ちを強く抱くことが多いのです。

他方、子どもの側でも、親の不在や、日常生活の小さな変化、さらに病状を伝えられていない場合には、違和感のある会話がくり返されることによって、これまで当たり前にあった安心感の喪失を重ねることがあります。子どもは、これまでの当たり前だった日常生活や親子の関係性を失い、「病気は治るはず」と「死んじゃったらどうしよう」という二つの思いの間でバランスが取りづらくなる場合があります。それが親とのコミュニケーションの取り方に影響を及ぼすともいわれています。

このような患者親子に対する、病院での支援の目的は、親と子が互いに大切に思い合っているこ

とを再確認することです。直接的に言葉や態度で表すことを支援することもあれば、間接的にアルバムづくりやお守り交換などアート作品を通して気持ちを表し合うお手伝いをすることもあります。親子のコミュニケーションがより深まり、互いへの愛情が生き生きと感じられるようになるとき、それはその後、たとえ子どもがひとときグラつくようなことがあったとしても、バランスを保つための一助となり得ると思います。

現在、DPC のソーシャル部門でも、ルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所から継承し、病気や事故などで大切な人と死別した子どもや家族を対象としたグリーフサポートの集まりを開催しています。数年前に、この集まりに参加した子どもが成人し、次のような言葉を寄せてくれました。「私にとって集まりは安心できる場所でした。本当に共感してもらえる仲間がいるという安心感がありました」。参加者のこうした言葉を励みに、グリーフサポートの活動は現在 21 年目となる歩みを重ねています。

なお、筆者は、『子どもをつむぐものがたり～プレイセラピーの現場から～』（日本キリスト教団出版局、2018 年）において、このような子どもたちとの出会いや体験をまとめました。



DPC 所員 関野 和寛

教会・牧師に委ねられた「牧会」という働きには一体どのような力があるのでしょうか。

多くの牧師たちは神学校を卒業し、神と隣人に仕えるという希望に胸を膨らませ現場に出る。御言葉とキリストのわざをもって困難の中にある人々を支える事を目指し、そしてそのようなキリストの愛が溢れる教会形成を目指す。だが実際はどうであろうか。現場で出会う困難を抱えた人々を前に、最善の対応をするが上手く行かず、結果的に互いに傷つけあい疲弊してしまうケースも多い。

さらには実際の教会の現場では宣教・牧会に割ける時間は少なく、複数の教会や施設の兼務、求められる庶務で忙殺されている牧師の数は多い。教会の宣教・牧会について話し合い、進む方向を決めるべき役員会も大半の時間を教会行事、経済難、建物維持などの議題に時間を割いている事が分かる。

牧師も役員も信徒たちも神に召し集められ、宣教・牧会に派遣されている共同体であるはずなのに、何故に宣教・牧会は今日思うように進展しないのでしょうか。

筆者はその糸口を探るべく、香港ルーテル神学校のドクターオブミニストリー（宣教牧会・博士課程）コースの門を叩き、そこでステファンミニストリー（信徒牧会者育成）という働きに出会い、それを、任を与えられている東京教会に 2016 年より導入している。ステファンミニストリーとは、ルター派で臨床心理のスペシャリストであるケネス・ハーグ氏が始めた、信徒を牧会者として訓練し教会を生きたキリストの体へと形成していくメソッドである。このミニストリーでは、信徒による牧会の働きを導入したいと希望する教会

が、複数の信徒や牧師を 1 週間の信徒牧会者育成のリーダートレーニングに派遣する。そしてトレーニングを終えた信徒・牧師が各教会に戻り、信徒にトレーニングを施し信徒牧会者を育成するというものである。

ステファンミニストリーでは合計 50 時間の座学（聖書学＋心理学＋カウンセリング技法）＋ロールプレイ（実践）を以って教会の牧会を皆で担っていく事を目指す。その内容はカウンセリングの基礎的な傾聴、バウンダリーの確保（どこまで何をして何をしないか、線引きを見極める事）、教会がなすべきことではない時の専門家への連携の方法、自死の危機にある人への対応、キリスト者にしかできないケアとその実践、訪問や SNS を使ったケアなどである。

実はこのステファンミニストリーは 1980 年代後半から 1990 年代に、日本の超教派の教会リーダーたちによって日本に導入が試されていた。この DPC（デール・パストラル・センター）の前身の PGC（人間成長とカウンセリング研究所）の所長であるケネス・デール先生もそのリーダーの一人であった。PGC をはじめとし、日本のキリスト教会の中で牧会カウンセリングが取り入れられ始められた。そしてその中でこのリーダーたちは教会単位での信徒牧会者の育成の必要性を感じ、ステファンミニストリーの導入を試みていたのだ。91 年には聖文舎の協力により、アメリカよりステファンミニストリーの講師を招聘し、全国 5 か所のルーテル教会でワークショップを行った。けれども、このミニストリーは日本の教会に定着する事はなかった。

当時のリーダーであった牧師に聞き取り調査をすると、日本のキリスト教会に信徒牧会者育成が

根付かなかった理由は二つある事を教えられた。一つ目は時期尚早であった事である。バブル後の時代、人々は未だに成功と社会的ステータスを追い求めていた。その中で教会の中において弱さを誰かに話すという事は今よりはるかに難しい状況であったのだ。二つ目は根強い教職主義であった。ただでさえ教会で弱さを牧師の前で出しにくい中で、抱えている問題を他の信徒に相談するという事はまだまだ受け入れられなかったのである。

さらにステファンミニストリーのメソッドと日本の教会の過去の試みを調査する中で日本の教会の牧会の問題のボトルネックに気が付いた。それは日本のキリスト教会はその形成段階で、どの国よりも教職中心優位主義が固定してしまっている事である。信徒神学者のヘンドリック・クレマーは信徒の力が教会で生かされていない状況を「凍結された資産（訳によっては冷凍人間）」と言った。クレマー自身日本の教会を訪れたが、どの国よりも日本の教会では信徒が宣教・牧会に携わっていない状況に驚いたという。

確かに現状を見ればそれを否定はできない。教会にとって牧会とは第一義的に信徒が牧師から受ける事を意味してしまっている。信徒は牧師から訪問され、お見舞いを受け、手紙や電話を貰う事を牧会と捉えるようになってしまっている。確かにそれらは牧会の大事な要素ではあるが、牧会の中心でも全てでもない。それは牧会の中の「パーソナルケア」であって「パストラルケア」ではない。

使徒パウロは教会に対し「互いに重荷を担い合いなさい」と語っている。当然、人々の重荷を背負うのは牧師独りではない。信徒が互いに重荷を担い合うのであり、時に牧師も信徒からケアを受ける事だって起こりうるのだ。だが現状はそうはいかず、おおそ牧師は独りで複数の教会の多数の信徒のパーソナルケアを行い続けている。

しかも継続教育、トレーニングを受ける事ができない状況で二つ、三つと教会を任されまた他の

多くの業務を担い、限界まで追い詰められている牧師は実に多い。そしてその中で牧師は弱音やSOSを教会の中で口にすることが難しい。

このような教職中心主義、牧師だけが主に担う体制は戦後のキリスト教ブームの中で更に固定されてしまったと言える。戦前の1940年と戦後1950年代のピーク時のデータを比べてみれば受洗者数は10倍近くになり、教会の建物も倍近くに増えている（日本福音ルーテル教会データ）。キリスト教ブームと呼ばれるこのムーブメントの中で確かに建物の数と教会員数は劇的に増えたが、その中身の宣教・牧会は器に合わせて熟成したとは言えない。むしろ膨らんだブームを支える屋台骨である信徒のトレーニングがなされぬまま来てしまい、そのツケを牧師がカバーしようとしているのではないだろうか。

このような状況は幾度となく検証され論じられて来た。それを打開しようと信徒を育成する講座や冊子が何度も発刊されては消えて行き、実際の課題を乗り越える力とはなり得ていない。理由は同じである。どのようなテキストを発行しても、どのような高尚な講義がなされようとも堅固な教職中心主義がそこにあり、信徒に具体的な宣教・牧会の働き口を示すことができていないのである。

そのような中で、信徒と牧師が共に牧会の主体になるステファンミニストリーは、この状況を打開するひとつのメソッドになりうると考えている。日本の牧会カウンセリングはアメリカよりも30年の隔たりがあると言われる。そして奇しくもこのステファンミニストリーが日本に最初に持ち込まれてから約30年の時が経とうとしている。時を同じくして多くの教会は今、会員の高齢化、牧師不足、経済的困難などで存続の危機に立たされている。だが教会には信徒という最上の力がある。その最上の力を、クレマーが言ったように凍結させたままでおいてよいはずがない。今こそ牧師・信徒が共に牧会を担い、教会の真の力を発揮する時ではないだろうか。

2017年2月に開かれた「第2回臨床牧会セミナー（第51回ルーテル教職神学セミナー）」は、この年がルター宗教改革500年であることを憶え、若きルターが中世末の時代に生きる葛藤から聖書の福音へと導かれたことに因んで、主題を「宗教改革500年 時代を生きる苦悩～魂にふれる牧会」と決めました。基調講演は江口再起先生による「青年ルターと心の問題～エリクソン『青年ルター』を読んで」。現代に生きる人々、特に若い人の課題に教会がどのように向かい合うのかを聴きました。また、分科会は「教会と若者」（松谷信司氏）、「ジェンダー」（平良愛香氏）、「女性とDV問題」（松浦薫氏）、「自死と教会」（賀来周一氏）の4つに分かれ、それぞれに今日の牧会の問題について学びあい、分かちあいをしました。

3日間にわたる学びのまとめとして、セミナーの最後に石居が短い話をいたしました。以下にその要約を掲載いたします。



時代を生きる苦悩 ～魂にふれる牧会

デール・パストラル・センター所長

石居 基夫

今回のセミナーは「時代を生きる苦悩」ということでした。苦悩の姿は様々です。私たちは、教会という場所でその苦悩をちゃんと見出しているのか、その苦悩を持つ一人ひとりを受け入れられるような教会になっているのかと考えさせられます。

今回、分科会で取り上げた若者の苦悩、あるいはジェンダーのこと、それから女性・DVの問題も自死のことも、今日を代表する課題といってもいいでしょう。個々人は、その人の個人的な特性のみならず、どういった家族の中にあるか、さらに広がって社会・文化的な関係性を持っているか、そしてそうした諸関係の中でどのように生れ、育ったのかということによって、複雑な課題の只中で苦悩を深めているのがわかるのです。ところが、多くの場合、それらは「隠される」という性格を持っているのです。一般にもそうですが、教会であればなおさら、あまり明らかにされたくない問題なのです。実際に苦悩が存在するにも拘らず、それを表すことができないし、隠されていく。そうした現実の中で、改めてそれらの「苦悩」に今一度向き合うように、今回のセミナーで、私たちは学びを深めることができたと思います。

私たちは、そうした「苦悩」に関わるために牧会者として召されているはずなのです。けれども、本当に私たちはその苦悩に関わり得ているのだろうか。そもそも、関わる自分が自分にできるのだろうか。そう思われます。牧師である自分も罪人の一人であるし、自分自身の中に差別性や暴力性が潜んでいたり、孤立し、また深い心の問題を抱えているかもしれない。今回のセミナーは、そういう自分自身を改めて見つめ、深く考える機会ともなったことでしょう。

【時代の苦悩とは】

今の「時代の苦悩」とは、どのようなものなのか。例えば、日本の一般社会の中で宗教的なものが居場所を失ったのが1995年のオウム事件以降でした。それまでは心の時代とか宗教の時代と言われ、宗教に対してある種の期待があったように思うのです。けれども、その時でさえ、教会はその時代を捉え、応えていたかどうか。これも問題です。多くの優秀な青年たちがあの狂気のような教団に吸い込まれていったときに、キリスト教会は何を伝えていたのかと考えさせられます。そして、95年を境に宗教が怖いものとされ、人々の苦

悩に教会はなおさら入りにくくなったように思うのです。

同じ 90 年代後半には多くの人たちにパソコンが用いられるようになり、やがて個人の携帯電話が続いて出て来て、ゼロ年代にはスマホの時代になっていく。この IT は、新しいコミュニケーションの形を作ってきていて、人と人をつなぎ、様々な可能性を秘めているものです。しかし、また逆に、実はそうしたツールによって私たちの関係のあり方に難しさも出て来て、また孤立化させられているのかもしれない。仮想世界ばかりを見つめて、現実の世界が見失われていないか。生きるということが小さな画面の中に吸い込まれてしまってきたのではないか。ですから、一方では、私たちはこの IT によって一瞬にして世界と結びつけられ、地球の裏側とすぐにつながる、時間や空間という制限を超えていくような自由がある。他方では、孤立化が進んで、純粋な心が、傷つきやすい魂が世界に彷徨っている感じもあります。私は、IT プラトニズムの時代と呼んでいます。

こうした世界の中で、傷つきやすい人たちがいろんな苦悩を抱えている。今の若い人たちの、あるいは若い人たちだけじゃないかもしれない、私たち自身が、人間らしいつながりを失い、孤独な世界に生きている。そうした苦悩が隠されているし、誰にも表さないというそういう問題に私たちは直面しているのではないかと思います。

【教会・信仰者の使命】

そうした時代の只中で、宗教、キリスト教、あるいは教会はこの苦悩にちゃんと向かい合っているか。私たちは福音をどう伝えられるのか。その苦しみの中にある一人ひとりにちゃんと繋がりを持っていけるのか。それが今、試されている時ではないかと思います。

世界が、人類史上かつてないほどのスピードで変わっている。だからこそ、宣教・伝道といっても、今までの考え方ややり方では、通用しない。

そもそも届けようとしているのか、ということでもあるのです。教会が閉ざされた場所になり、そこにいる人たちのためだけに存在しているようになっていないか。もちろん、集っている人たちが大事にされない教会であってはならないのですけれど、それだけでは時代の苦悩に向かい合っているということにならない。私たちがどういふふうに、世界の中に言葉を持っていくのか、届けるのか。自分たちにしか通じない言葉で語っていないか。あるいは、そこで使われている伝統的な言葉でさえ、実は、そういう苦しみを持っている人たちを抑圧したり、苦しめたりする言葉でしかなかったのではないか、という反省も出されてきている。これが、今私たちが、いちばん新しく経験してきていることのように思います。

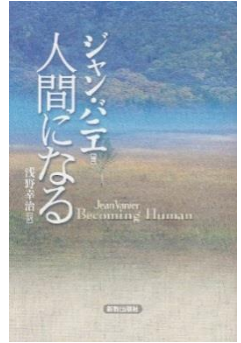
ですから、私たちはまずその苦悩に寄り添い、その只中に生きている人々の声に聞かなければならないと思う。神は、民の叫びを聞いて、出エジプトを導かれました。主イエスは、貧しい人や病人、悪霊につかれた人のところに出かけていかれて癒し、赦しを宣言されて、福音をもたらしたのです。私たちは、人々の苦悩の声をどう聞いているのか。

石牟礼道子さんがあの水俣病の現実の中に身を置かれて、『苦海浄土』という本を書いているのを読みます。その中でご自分の使命を語って、未だうかばれない死霊、生き霊の言葉にならない声を聞き、紡いでいかなければならないというのです。現代に生きる巫女として、自分の宗教性を持ってそれをするのが自分の使命だと。

私たちは、この時代を生きる牧会者として、今を生きる苦悩、あるいはすでに亡くなった方の苦悩、その声に、叫びにどう聞いているのか問われているのではないかと思います。そして、その使命において、キリスト教の伝統的な言葉だけではなく、他の宗教や、あるいは宗教を持たない人たちともつながっていくスピリチュアリティに、深く学んでいく必要があるのではないかと思います。



この欄では、毎号、DPC 所員からのお薦めの本をご紹介します。所員が、パストラル・スピリチュアル・ソーシャルの各分野、また、それぞれの関心により選びます。今回は堀肇所員からの1冊です。



『人間になる』

ジャン・バニエ著 浅野幸治訳 新教出版社 2005 年、1,900 円＋税

バニエの著作は本書よりも『小さき者からの光』などの方を先に読まれた方が多いのではないかと思います。彼は 1928 年、フランス系カナダ人としてスイスに生まれ、海軍士官を経て大学で哲学と神学を学んだ後、知的障害を負った二人の子どもと出会い、「ラルシュ共同体」を創設するに至ります。この共同体は世界中に広がり、現在 147 か所に及んでいます。

『人間になる』(Becoming Human) は、カナダ放送協会とトロント大学マッケシー学寮の依頼を受け、ラジオ番組で放送された 5 回の講義です。内容は、「孤独」、「つながり」、「排除でなく、受け入れることについて」、「自由への道」、「ゆるし」の 5 つのテーマが論理的に展開されています。

バニエによれば、「人間になる」とは、自分の心を他人に開くこと、つまり「仮面のうしろに身を隠したり、恐れや偏見で自分を閉ざしたりしないということ」であり、それは「共通の人間性」を見いだすことだと言います。それによって「孤独は愛に変わり…愛は繋がりの中で繋がりを通して育つ」、また自己中心的な衝動や心の傷から自由になることができると力説しています。

本書は人間を理解することに焦点が当てられていますが、人間を理解することが「霊性の扉を開く試み」だと語ります。バニエの洞察によれば「霊性を無視しては完全な意味で人間となることができないように…人間であることを無視して霊的に成長できない」というわけです。

牧会者は常に信徒や求道者の人間性に関わっています。しかし同時に霊性に関わり、その扉を開く奉仕の中で苦悩しています。本書はその現実には深い洞察と光を当ててくれる牧会者必読の書と言ってよいでしょう。

(DPC 所員 堀 肇)



●『詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～』第Ⅱ期

本文でご紹介しました本講座の第Ⅱ期の日程は 9 月 14 日、10 月 12 日、11 月 9 日、12 月 14 日。

いずれも土曜日 13：10-17：00。受講は、6 月 20 日より、本学 HP にてお申し込みいただけます。

●ソーシャル部門「だいじな人をなくした子ども」と「だいじな人をなくした子どもの保護者」の集まり

今後の日程は、7 月 27 日、9 月 28 日、11 月 30 日、1 月 11 日、3 月 28 日。

いずれも土曜日 13：30-16：00。必要な方にぜひご紹介ください。

上記の詳細は本学ホームページをごらんください。



●編集後記 長く続いている集まり。新しい講座。DPC の輪の中で、これからも出会いと祈りが重ねられ、その働きが、少しずつ「なくてはならぬもの」として用いられますように。

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：石居 基夫

181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580 (直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp <http://www.luther.ac.jp/>